

主体的に学ぶ力の育成と 小学校外国語教育の課題

第2回

児童一人ひとりの 学びを生かす指導への転換

早川 優子

国立教育政策研究所教育
課程研究センター研究開発
部 教育課程調査官。
文部科学省初等中等教育
局教育課程課外国語教育
推進室教科調査官。



子どもの主体的な学びを支える指導とは？

小学校外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」をテーマにした早川優子先生へのインタビュー企画、第2回は「児童一人ひとりの学びを生かす指導への転換」です。

「令和答申」(*)では、小学校学習指導要領に掲げられた授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」を『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を通して行うことが提言されました。同答申において、その背景にあるものとして例示されたものの一つが「児童の多様化」です。実際、現場の先生方から「従来のような一斉指導だけで、全ての子どもたちに力をつけさせることは難しくなってきた」という声が聞こえてきています。

画一的でない、児童一人ひとりの興味・関心や特性に合わせた指導はどうあるべきでしょうか。

※「令和答申」

中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(令和3年1月26日)

児童の多様化と デジタル学習基盤の 活用

児童の多様化は喫緊の課題の一つです。私の出身である山梨県では、その対策として、全国に先駆けて少人数教育に取り組んでいます。その効果検証では、教師が児童の学習状況や生活の様子を丁寧に見取ることができるようになり、そのことが児童一人ひとりに合った指導の充実や児童の学習への関心の高まりにつながっていると考察されています。

このように少人数教育の有効性は認められつつあるものの、その推進には教員確保や連携体制づくりなどが不可欠で、実施は容易ではありません。そこで、デジタル学習基盤を活用して個に応じた指導を充実することが期待されています。

とはいえ、一人一台端末を活用した個別学習は、優先しすぎれば「孤立した学び」や「分断」に陥ってしまうこともあります。デジタル学習基盤の効果的な活用に取り組む実践が増えている中、改めて教師がいかに児童の学びを価値づけ、気づきを促す働きかけを行うかが重要となってきました。

言語活動の目的や 場面、状況等を 自分ごととして捉える

では、外国語の授業における価値づけのポイントは何でしょうか。児童が自分に合った学び方を選択し、学んでいくことが可能になるからこそ、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を児童が自分ごととして捉えることができるかが授業の鍵となります。

小学校の先生方は、言語活動の重要性を理解し、毎時間、言語活動を積み重ねながら単元



を構成しています。各単元や各時間のはじめに、一人ひとりが学習のめあてを考え、それを学級全体で共有する実践もよく行われています。しかしながら、こうした手立てが、児童の主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながっていない状況も見られます。

たとえば、多くの授業では、単元の導入時に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を把握するために動画を視聴する活動が設定されています。視聴したあと、わかったことや聞き取れたことの確認で終わっていませんか。ここで、児童が単元の学習の見通しをもてるように働きかけることが大切です。

大抵の動画にはターゲットの言語材料が使われ、単元ゴールの言語活動を連想させやすい場面や状況が盛り込まれています。教師の問いかけを通して、児童がわかったことや推測できたことを引き出し、言語活動の相手や目的などを意識できるようにしていきます。

その際、教師が説明しすぎると、児童の主体性を損ないかねません。やり取りを通して、児童一人ひとりが「こんなことを伝えたい」「こんなやり取りができるようになりたい」とコミュニケーションの見通しを具体的にイメージできるようにすることが大切です。

見取りを生かして 主体的な学びを促す

授業内の中間指導も同じです。言語活動を行ったあと、児童が英語での言い方がわからず困ったことなどを全体で共有する場面があり

ます。その際、教師はこれまで学習したことを関連づけながら、児童一人ひとりの考えを大切にし、互いに学び合えるように働きかけたいものです。

そのためには、教師が児童一人ひとりの学習状況をしっかり見取る必要があります。言語活動に取り組む様子を観察し、目的や場面、状況等に応じて、自分の考えや気持ちが相手に伝わりやすいように工夫して話したり、デジタル教科書を使ってわからないことを調べて練習したり、友だちと互いのパフォーマンスを録画して改善点を話し合ったりしている姿を賞賛すれば、児童はそのよさに気づくことができるようになります。それを学級で共有すれば、学習を改善するヒントになります。

こうした指導は、一人一台端末を活用することで実現しやすくなりました。パフォーマンスの録画や振り返りの記録など、学習支援アプリなどを使用すれば、教師と児童間、児童同士で瞬時に共有できます。児童が成長や課題に気づき、次時に向けて学びを調整できるような振り返りの時間を確保することも重要です。



児童に委ねる場面と 教師が指導する場面で 授業にメリハリをつける

児童の主体性は大切にすべきですが、教師が指導をしていけないわけではありません。児童にターゲットの語句や表現が十分に身につけておらず、誤りが見られた場合は、その場で教師が指導する必要があります。適時、適切にフィードバックを行いながら、単元の中で教師が指導する場面と児童に委ねる場面との軽重をつけることが大切です。

児童一人ひとりが外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせられるよう、デジタル学習基盤を効果的に活用し、コミュニケーションを図る資質・能力の育成に向けて指導していただきたいと思います。

(2025年4月15日取材)



文部科学省の公式チャンネルMext Channelでは、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図りながら、言語活動を通して「話すこと[発表]」の資質・能力を高める指導に関する実践動画が公開されています。

ポイントとして以下の3つが示されています。

- ① コミュニケーションを行う明確な目的や場面、状況等の設定
- ② 児童が自身の話す内容を見通したり、改善したりする場の設定
- ③ 教師やALTによる適切な見取りと指導

引用・参考文献

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して

～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）

令和3年1月26日 中央教育審議会



学びラボでは、全国の小・中・高等学校の先生や教育委員会関係者に向けて、授業実践や教材にまつわるコラムなど授業で役立つ情報発信をしています。

学びラボ特別号

第1回「外国語教育における『探求的な学び』と自己調整力」はここから▶



Junior Sunshine Letter Vol. 7



早川先生の過去の記事は
当社HPで読むことができます。



特別号

非売品

2025年10月10日発行

編集兼発行人 岩塚太郎

発行所 開隆堂出版株式会社

<https://www.kairyudo.co.jp/>

※本資料は一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

北海道支社 〒060-0042 札幌市中央区大通西11-4-21 52山京ビル7階

東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階

名古屋支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-15-18 オフィスサンガヤ9階

大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16

九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階

☎011-231-0403

☎022-742-1213

☎052-908-5190

☎06-6531-5782

☎092-733-0174